

## 『文藝春秋』

2015年02月17日

ある老婦人が「先生、難しい本ばかり読まないで、こんな本も読んでみてください」と『文藝春秋』を貸してくれた。以来、毎月貸してくれていたが、数ヶ月後には、高齢で読めなくなったのか、来なくなった。最近、『文藝春秋』の新聞広告に、読んでみたい二つの読み物が載っていたので、久しぶりに買って読んでみた。

読みたい一つは、小野正嗣氏の芥川賞受賞作の『九年前の祈り』である。小野氏は大分県出身で、私と同郷である。彼は故郷の土地に拘る作家だそうで、読んでみたいと思った訳である。主人公のさなえは東京でカナダ人と同棲し、一人息子を与えられる。その子は可愛い顔立ちであるが、人との交流ができない。時々、引きちぎられたミミズのようにのたうち回る痙攣を起こす。二人は離婚し、シングルマザーになったさなえは、過疎の漁村に帰郷する。そこで、出会う旧知の女性たちとの交流を、かつて彼女たちとカナダ旅行をしたことと重ね合わせて、描いている。失意で帰郷したさなえが、彼女たちとの交わりの中で、一条の光を見出していくという内容である。漁村の女性たちはおおらかに丸ごと受け止め、母子を包み込む。その会話と振る舞いに心地よい暖かな海風を感じた。大分弁が懐かしく、そして、人と人との関わりが、私が経験したのと同じ田舎風で、登場人物たちに親しみを感じながら読んだ。

もう一つ読みたかったのは、引っ張りだこのジャーナリスト、池上彰氏と佐藤優氏の「イスラム国との『新・戦争論』」と題した対論である。議論は多岐にわたるが、「後藤健二さんのキリスト教的博愛精神」についても語っている。後藤さんは、先に「イスラム国」に拘束された湯川遥菜さんを救い出したいとシリアに入った。その姿勢を、同じ日本基督教団に属する佐藤氏は「九十九匹の羊を残してでも一匹の迷える羊を探しに行かないといけない、そういう感覚が強い方だと感じます」と言っている。そして、シリアに入る直前に「自己責任」で行くと画像に残している。自分でリスクを負うフリージャーナリストとしての判断を、二人は高く評価している。「イスラム国」が今後、世界革命を目指した旧ソ連のようになれば、悪夢の再来であり、また、中東全域が核武装化されれば、最大の脅威になる。時代は大きな問題を抱え込んだ訳である。

日本との関係が最も気にかかる。佐藤氏は次のように語っている。「日本政府が自覚しなければいけないのは、人道支援を一生懸命やるということは『イスラム国』から見れば大変な敵対行為であるということです。日本は、この認識が薄い。今回の事件でも、2億ドルが人道支援であることを繰り返し強調しました。私はなぜそんな釈明をするのだろうと思って見ていました。人道援助であることを強調すればするほど、敵対していることが露わになるだけなのです。日本も、この戦争の当事者であることを忘れてはならない。」池上氏は次のように語っている。「安倍総理が受け取った『侮辱は許さない』という思いが、今後どういう方向に向いていくかです。政治家も国民も、今回の人質事件で気付かされた『イスラム国』の標的になっているという自覚を持ち、さらには自分の覚悟がどこまであるのか、見つめ直さなくてはいけない時が来たようです。」

私は、二人の悲劇的な殺害を受け、日本は世界に平和を呼びかけると期待した。安倍首相は逆に、武力を強め、自衛隊を海外に出す、そのための憲法改定に向かっているようである。そして、ジャーナリズムは自主規制をし、安倍首相を批判する者に対し、バッシングする風潮が広がっていることにファシズム前夜の不気味さを感じている。